



花紅糸部新

天
台
の
部
明

71
2950
1





此書ハ京師大火災のり成委しく紀し又厚くも
 聖主明君の御仁惠小くも早速家普請多し
 出来諸民業成樂し又強し竟天舜日成りん
 りの強有さふく強くび程一乃世の末もくも

愈花紅葉都嘯

御厚澤成不忘驕奢といふしめ只質素のゆひ
 此の心火の用心大なりといふは成りたしと
 徳名成りて外奇法多し成るは 修入三冊

京都書林

芸香堂



と

心もと成りて
 本心成りて
 性急固力先子
 古々成りて

何某が望ほむもの極その大
 小思ふ成長の後ねは
 又影に種にもおほね
 且多なる高木なれど人し
 笑書にいふに油に古令

若くも心してを窺ひ
 如く海に波はたかき
 立ぬる人にもせしめ
 以てとすなりけり
 志す所は又なれども
 ちく如くさなる文辞

拙いものハ勿論おのれハ
 能くともあれ法に
 沿ふるはたやうな
 取らるる事なるに
 際するに我ハ
 深き心を以て

事誠然とシテ法に
 沿ふるに法を以て
 此事を志すハ只
 心を以て

焦燥主人

小林主人

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

花紅葉都断

目録

一 燒失の次序并燒失時刻の考

一 聖主賢佐上小出のひ忽ら堯舜れ世とありく万民

業と樂び事

一 神社佛閣所教電教燒失れ教丸の是書

一 火災小付種々奇談の事

一 諸名家詩歌連佗の事

一 聖代有難と正律ありく法民樂くと業は

よのーびき

附録

花の都観音標

夏お語

花の都観音標

天小之哭ありとのく時ト高恒定ありくぞ乃

時ふりしんきんの竟舞文武の沛世とそもそまひと

先はまりのわらひらびらとやされを平安あん都冬

四神しんお意お万代まん不ふ援えんの帝基ていよりく山さん川せんは

秀しゅう麗れい人物じんぶつの温ぬる和わよそのままよりも中ちゆうよりりぬぬ況げんや

四し時じの政令せいれい享祭きやうさい意いととめめふふすすおおくく白馬はくば乃

節せつ今いまよりりをを不ふ洗せんの儀ぎ式しきととくく仍なほほほととくく風

潤うるひひ雨あめ順じゆんよりりくく時ときよよ意いとと万民ばんみんをを平へいれれ化くわ瓜

花の都観音標

一



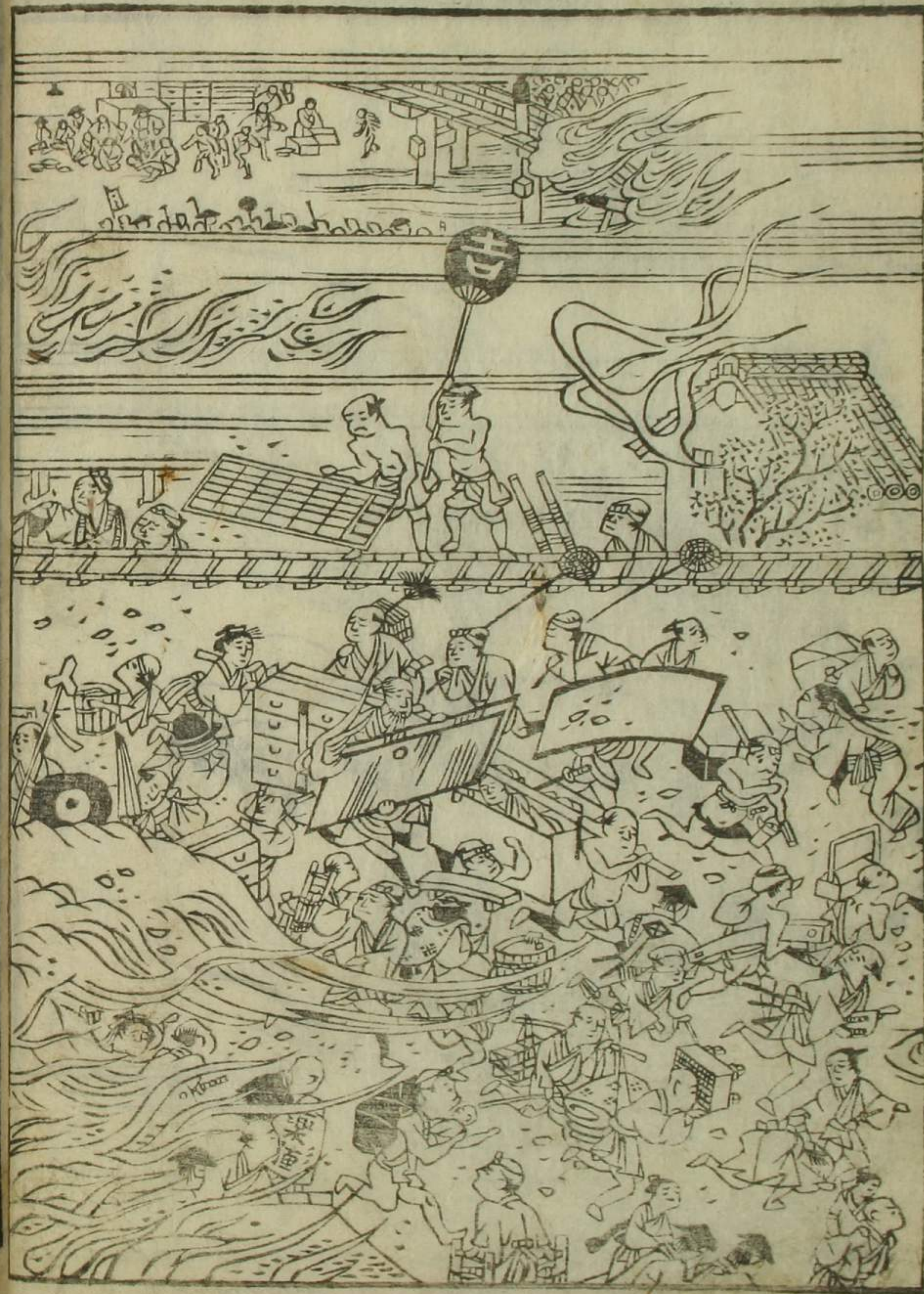
風より子母の方より風起つて世の刻小りしりしり
 林小烈しく富の下刻より富知くら小吹く松
 人馬も倒れなまりしりしがけ曉知の上刻落東
 圓栗の辻子 豊城の巽方く略長めが方丈紀に記せし
安永年中の大火も都の巽方より富小海
極口より出火しころん 新道の巽れ角やしけるる西音
 店何来とくやい急付人家の滿壁の空やより出火
 こところんおしも暴風志たつふ吹きまく小なる垣
 町口糸下れ中松と南と文門町及び比川路の
 乃瓜入糸橋通りと入六町斗の乃瓜後一回小

焼く五条の大橋中程より中筋本より北の方九
 十のり斗焼落は焼く欄干は多く人馬は
 是より風辰巳の方より吹替り飛火の吹着るの
 ごとく海中に噴火し一呵呀と云る内寺町通
 仏光寺下所永養寺知恩院の本堂の破風
 一燃射それより津國寺永養寺南隣俗に蓮池寺と
 一掃り志げしの方より菽の下通西へやけぬき
 仏光寺一掃り因幡茶師菅大長の社へより
 又山の方へ六角堂と云ふ所の津登しは都より

おろり焼く焼落り船入の時よりこのりふ十本
 通寺寺の跡より焼ぬけ南の方へ本國寺へ
 掃り辰巳の方へ五重大塔より火のりけ塔
 南の方へ倒れおの西本願寺及び奥正寺の一
 と轟も然りすとあせ内には塔北の方へ倒れ
 くれはあ寺をともるごとくありしと云本國寺
 及び五条六条の方へ都より風上るれども津登し
 燃えより吹廻して七条を東本願寺乃南境
 まで焼落り都より中京下京のりよ煙火

卷きくおほい顧るるのあこころは東本願寺
 の志をくく防ぎ止めしつども後西水の方より
 焼来くよせられたるを焼失と西本願寺と
 大門毎敷樓のを焼失しそ外恙かし怪象
 人も救多ありしとぞは時興正寺門前の諸堂
 再建ありく若請小屋多く立ちしへは危り
 しと主自ら拈摩しあふにゆるく人と身
 命は限りと防ぐ内風巳午の方より吹来り
 く大雨志をくく小舟来りし時火口をぬとるり







雨火勢をさそひけり流く熾んの上系とささく
 焼ゆく東の方一筋七条色の火流より東山の
 方へ殊殺を所和穀津敏の世宣以七条本市場
 の山より下寺町より本谷町川系町の色以に
 糸の山より焼堂内中通り高倉をわ
 たりより新町をささぐのりは火勢は強く
 志むりに西山をさして二條堀川の方へ焼ゆく
 西の方れ一筋と堀川をより土ヶ寺ありさ
 千本通を流りに山の方へ焼のぼりささぐれ

三

五

津屋敷方二条千本巻の敷々の津屋敷
 焼くに焼失とすと津屋敷とあれは巻紀伊の幸に
紀伊の巻紀伊の巻と巻末に
 焼のやりと西津屋敷焼通り山の紫野人今又乃
 津屋敷所跡とつとと焼ぬけとほ又風成ま
 の方より吹起しく禁庭の津方忽あや
 まりの次巻ふ亥子の方へ吹起り海中海外
 津屋敷の始なり津城巻及び神社仏閣所
 家焼る方より焼及しく津東頂妙ち及び

とも巻と新地二条新地の在巻ふ焼失を法
 法輪寺俗小壇王との巻方所家より焼止は
 風巻の大方巻あやしくことと人
 け日の大風一定さうに一度の西一度の東或は
 水或は南揮うとく巻ふとく突よ狂風と
 巻ふべし既ふ巻六つ時石垣所か出火一回又つ時
 因幡堂佛光寺より壬生の那巻と焼く
 が本國寺の焼く一晚の七つ本本願寺は巻
 八つ時焼くより巻ふとく風巻定り巻る

志るへ一尋常の出火小あはれ始終かくの如く
 されば一度の焼跡りたりとあふもさうめぐ焼
 めぐり吹狂く都の地欠に跡さび灰燼とるは
 奇怪の事小そありるは東山より始終は刀居
 たり一人の物居一尋常の火の事事皆り火の
 風に揮きく地を走りて烟の内よりつくをそと
 よと刀居る内忽ち二三丁もあさるふ又らうく
 と刀居る風のさふみとぞ一たおとぞと火の事
 刀居る一とをそ夜の宣の刻にうりたる風も

けいさくとあみさく一何ふ火の事立のかり常れ出
 火のさく刀居る一とや跡小怪一かり一と
 上系の火の東南の方へ魔さ下系の火の西へ
 吹魔く中系の火宇宙に立登りてさ内へ
 鞠のさく又大なる二抱もありぬらんとさ一た
 火の玉風噴と様もさ右左に飛くけりけ
 火のさる赤鐵をのぐりとも一系の赤紙
 と焼くさく忽ち灰燼と成りとも又晦日
 の夜より初日の曉に至ると揺津河内大和

和泉丹波丹後辺に若狭都々十口又里乃
 乃火光懸結瓜深るがごとく言ふ映し月夜の
 ごとく煙の光る瓜のつげ〜〜〜夜は瓜ふせ〜と
 晦日朔日のあつら白益に火光玄烟にうらみ
 路程二十里の外や〜〜〜廢の〜〜〜と
 うわ〜〜〜在京の火消大名及び在國非番の
 所方も逃〜死つた東面小奔走と〜と
 防ぐ〜と方役も〜火已に所断を小を付
 當り〜と名〜と集り飛火瓜防〜と守獲

〜と夜入〜はひ風雨時に列〜と火勢
 益〜熾なりけ時〜と色〜と始め纏紳家一
 所小火移〜と〜と防〜と〜と方役〜と四
 方の寺院子撞瓜つ〜と音〜とを小響〜と
 け鐘瓜つ〜ともの〜と〜とを土の櫃下〜とを
 地下の百姓〜と世人〜と皆〜とよつた
 又〜と瓜瓜〜と釣〜とよ〜と一桶の
 水〜と湯煙〜と〜と〜と〜と〜と人
 い敷の〜と〜と堂塔の崩〜と音雷の〜と

ふくはにこそはししそをまよひびと猛火ま
 火焼く是は刀をくりの地と満つと
 ども魂は失ひ身のこどもは志くは
 畏れおどろごらふらふしおぼしむ日ふり
 うら雨のしととぬく電を降し砥石
 おどろこしおしさいらん方かしおしいう邪
 廣大の花繡世界只一夜の烟塵と化し
 上一人より下士庶の家に至はるく遺
 るく家秘の珍器什宝おぼしと焼失と

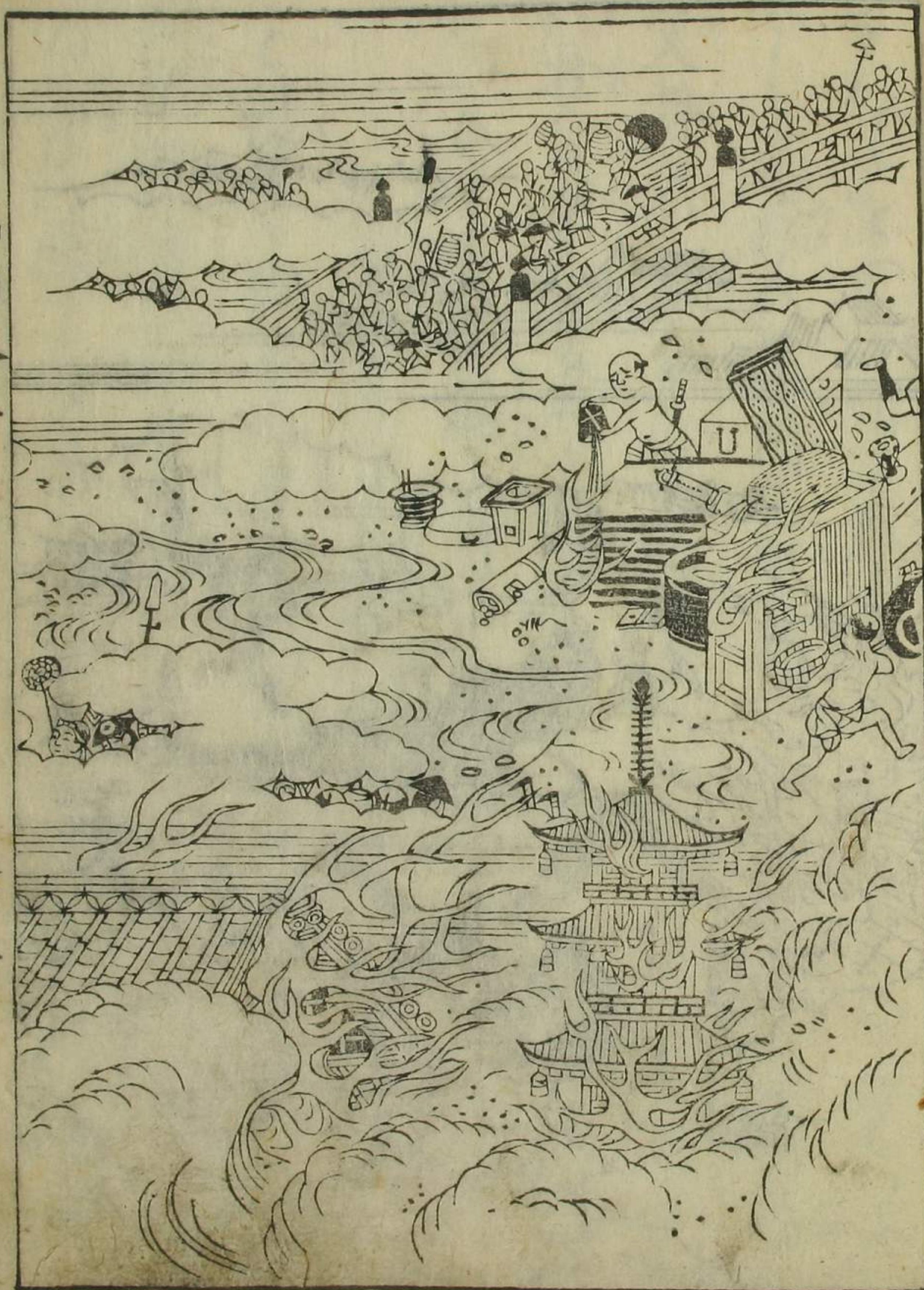
と嗚呼天さるるか
 押け度の人火の昔よりゆけはあしあしといふ
 室永の中の火の今も残りつて人々おどろかぬ
 るれど糸の断十が六分るりとうやむく應永
 の机の火も古記よととぬく記しとれど
 中しけ度の大火よ及べばと中者勝の長めが
 方丈の記よ記せば大風大火地震飢饉など
 つれごとく事なれば身の毛もよるるゆえ
 と火はゆりもふらふらとるれを京の内こがし

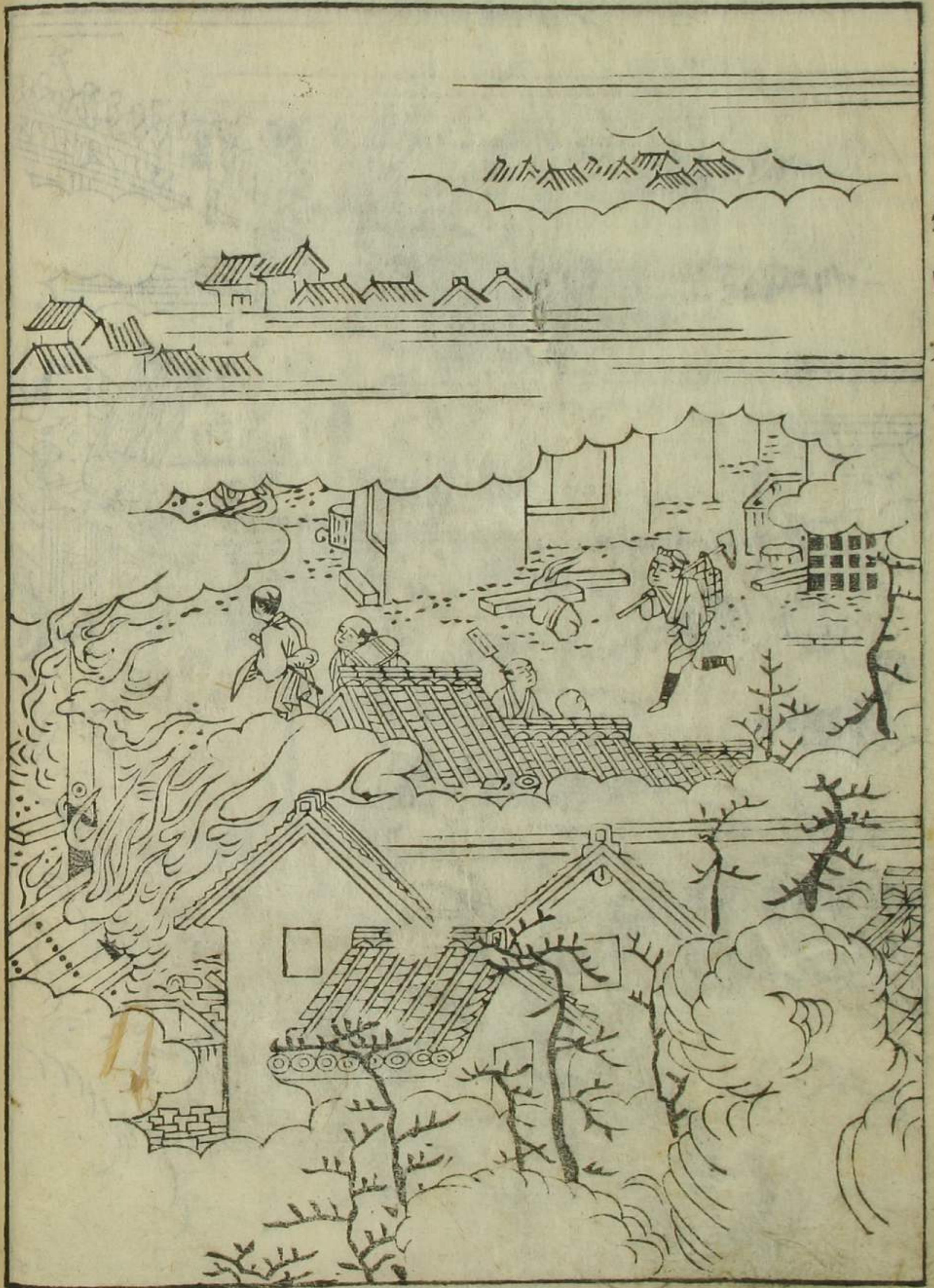
分の焼よりとは夜の火と海の中海外九分は重
の焼よりと始東風より海より下系乃
焼は時の上系より知音の人と馳あけり
火の勢を救ひしが志なきのるふ狂風火
焰を飛し四方に散れせし上系乃
も焼るといふ程をそあはんとすは
あひくふまきつゆり我者所をくんやれど
いりく烟火の内は坼れし何れも
もつらんこと住も還はれも只烟火乃中

それハ親子兄弟夫婦主僕もこころぐく
あはれしき身ひとりの系も逃れ難く右付た
付不途やうひ或はみよりあつひを焼く
死を怖るのそ程を志しに老人小思のそあ
甲けられく加茂川の廣場より出るといふも
猛火四方より礼と落れ風を吹くけ
くみも人らみ涙さけふ聲は海に響
こ焦熱大焦熱も外よりびられ中より
ふぐくくおうくはまもありとあは律傍

岡崎の巻くく来る侍伯父の寄家丸矢ひ
 へおとて侍と見付くさかくしこのふふせ
 つとゆり茶よ水よとあひくひて湯に乳分ぬる
 境小見見と顔かく似れども志くぬ今より
 一と又長るらんおさるた子の乳母子を片も
 小抱さ行も小然お持くのぐれしにるすせよ
 と急るりたれがまき焼お井戸へ投こめんま
 張く子の方お井戸へ投込たればやぐくま
 身も火の内へ飛入まきく室しくさりぬと







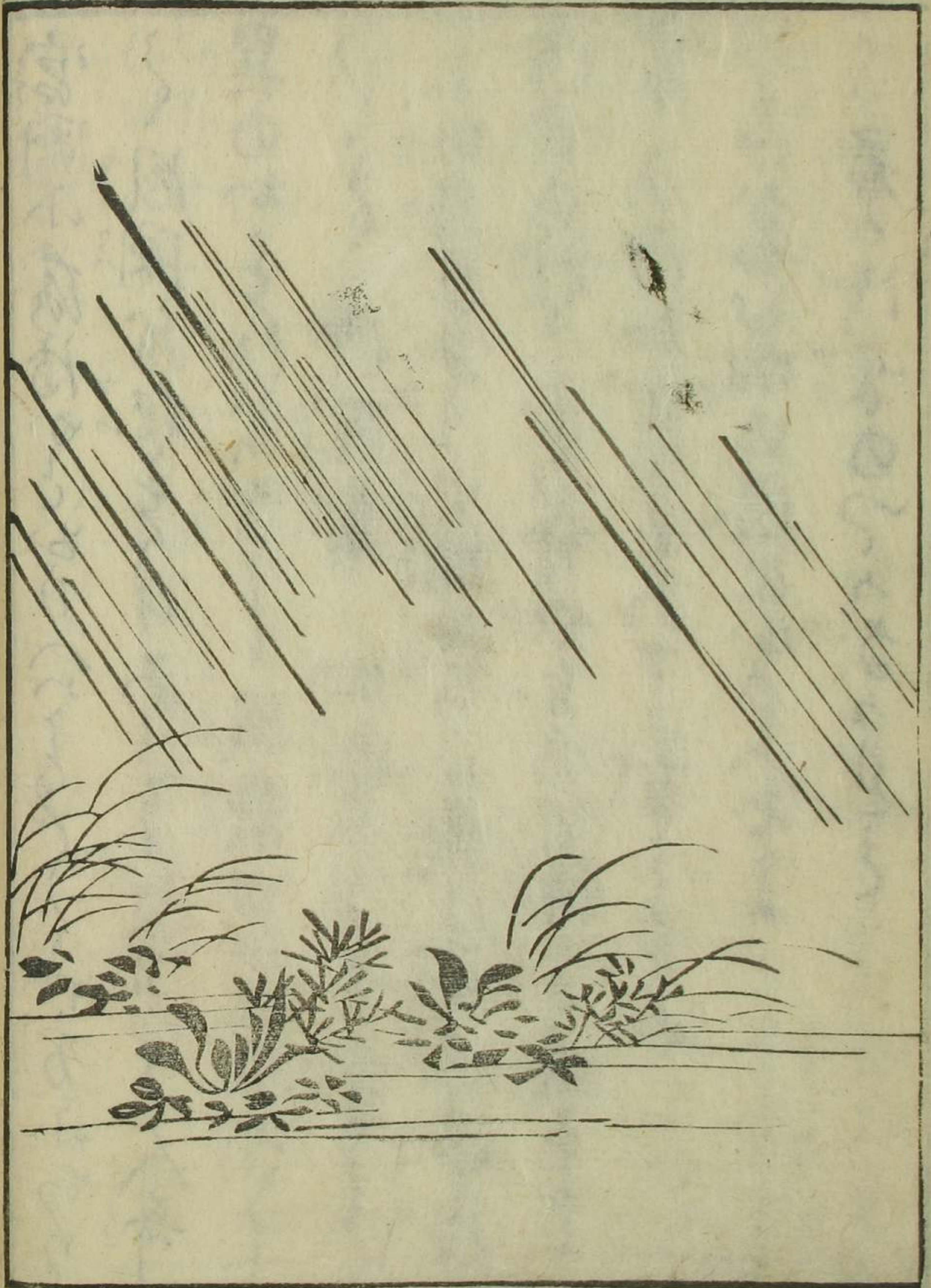
らね〜とや下婢うへひとれども我わがを志こころは人ひととて
 べ〜又また或人あるひと家内うちうちの器うつ扱あつか一ひとつも顧かへりそ何なに唯ただ
 父母ちちうははとてけてのぢぢおあ〜りの人ひとお〜
 い物ものはのけあ人ととと〜め〜うバ
 今いま〜子こ標しるしとさ〜ん我わが名なよ
 何なにとさ〜んおひおさん
 と續つづく出い〜り々さまざまはがけ家いえ煮ゆ〜く結むすり家いえ
 内うちの相あ〜互ひ一ひとつも外そと〜と〜と是これや天あま孝たか子こ
 の心こころ感かん〜この難なん〜ぬ〜と志こころ〜め〜り〜

外懸る付の枝をうへかかぐと再びおくりり
 吹り煙ふむびく死し又只あましく養ふあ
 やこひ養ひこしく焼死々付もありこの死ひ
 中しく亮子の書うのよとふふふふふふ
 只不思議さうらひの比病ある人ねんか
 け火かえんしく忽ち心奪とさうり春帰る
 俄よ出書せしもぬしと見らん昔永源寺
 の寂祖寂室禪師宋玉より帰朝の時船中
 しく刺病か病みとぬひしが俄小風あし

く船覆くんとせし小遊くす病ひ忽ち愈
 しく同日に死ひるしくんされん豊下禪師が
 岡丘流に病臥目幻けと悦とさうりも好り
 そやされば火いゆめく熾んよあふのく人
 焼ぬけそとより西海の方かふへ紫那の
 未と焼ぬけぬけ時風もあし終りけとど
 所所の所方の道とさせあうんとおくり内
 タアふむしく忽ち西の方よ悪風乾の方
 濃とぐしく起るよと見んねん悪風乾の方

ぐり吹きく息煙と霞霞の迎候は是におわく
 殿上の公郷ゆめんと議一のふよを國守
 獲の大名所用意ありと追入候しと急
 あはれ左右不備なかりし志教禰とりと久
 とも頼りふ人成進退を 御鳳輦公守護
 申しく何の所急もろく御人請ふ出御
 申し候とせ申候は有ぐとぞか久侍は
 十時御所の者秘成んをまのつし人の
 吟ふ鞠公投うけ候とせ火燭ありや

宮闕小落はかとおのへはとくく四方ふり
 く鳳輦公祀とりのあこしははる人奇
 異のおとひ成か—感歎せとけい—
 うくく 御鳳輦 出御しくと等し—
 息煙さひなり火燭忽ち宮闕よ落れしゆは
 御幸の折うしとの於供の公郷方道とく
 家くの御和おともあやと有りとうる
 つひかやじ烟の道におりんせよ
 君が御幸のつがかりとこと



け沛あふど沛供の公郷方の沛あふりとうる
 けへ一倭國は風雅優よ絶るり沛あふ心も
 いとあふ絶くそささ人作りかしく堂上方の
 上猶姫君も各く東山小山の色へ絶と悪
 かせとあひつれば常とさびしれとちささ
 貴人さる位の住居とるるりぬ又加茂吉田
 外社家官家の武士方を絶く沛縁
 家沛一門の上猶方とささけ出しなり
 右刀長刀はけけ社来は拂ひとるるそ

そればかりに余燭漸減するといふとも親戚
 一々い妻子女の死のさういふよき名を呼ぶ
 うげさともなく付く巷のそごいこよ人の
 死するふんをいそや父母のさよと保果を
 それぞまうこれを妻子女のあり一嬰か
 おかへ一立ふごとくもありまうこの親子
 主婦めぐり遠くものも死なせ公衆
 うの怒一みるくもあり悲愁のた
 のひ骨砕け恩をの涙血を志を人への

ふのうらな物よの死を命人鳴呼けの目いさる日
 その明日の梅柳農公獄に管経を公傳し
 大都只一冬夜よ一面の瓦礫場と爰と
 りの守護の神も力及いざらうとれを日
 終く上官着より下士庶よままう家
 焼失ひ一人一人の洛中洛外の社家寺院
 及び町家農家よ寄合ひ大家を二百人
 と百人小部よくも百人十人の住ひなる
 一又焼ゆり一終ふとに遮棚して住居人

或人の口どこみふ

見返せば亦も仲本もさうりたり

菴の戸あゝの焼の夕暮

又休ん暖燄水の色と大津のあそりやまて人

の充ざり所もさうく又ぶりの縁をともとめく

他はよき者ゝ糸の中よ十が四りさうり

さん又内縁されたんて焼物よを川系さど

に送らちりて雨霧をうせれたるさあをさ

いりんがふり或人の借りし雨夜あま

よの鶴はあそりかよはへるが怪しとさひ

うくくはひのけんぐのほく知りさうりしと

かして洛中の唯一面の焼舟と化し西街南巷

の分ちさうく三糸九陌もねねつとさうりし

さし昔慈仁の礼後よ飯尾彦六あまのが都の

群をこの夕ひをりあがけよつけくはるは候

かしてはも今日のあふんくさうりし

が突や東方をさす拂ふく百姓よさび夫目

の面は見え東の轍は同一文一行を同く賢君

上カミのりりなせせ賢ケン佐サ下ゲ小コ飛トビとト聖セイ主シュ徳トク成セイ施シし
 とト多タ人ニヒの忠チウ臣ニ國クニよヨこコらラ忠チウ時ジ京キョウ師シのノ所シヨ所シヨ司シ代ダイ
 英エイ所シヨ所シヨ奉ホウ仍ニのノ也ヤ也ヤ神シ明メイのノ方ホウありリくク唐タウ
 一の包ツツ龍リウ圖トもモ猪チウもモ多タ人ニヒはハ賢ケン者シヤうウれ
 ばバ神シのノ所シヨ仁ニ政テイ成セイれレこコらラもモわワりリかカつツた
 所シヨ觸ツクもモあアりリくク人ニヒ民ミン成セイみミくク多タ人ニヒをヲ
 堯イウ風フウとト沐ボクしシ霖リン雨ウにニ浴ヨクしシ万マン民ミン業ギヤクをヲこコの
 しシじジこコそソ者シヤ返ヘンけケしシとトしシれレばバ未ミだダとト才サイ季キもモ
 こコらラ未ミだダ巷キョウ陌バク依イ然ゼンとトくク坊ホウ境キョウをヲ分ワちチ十

可カの人ニヒ衆シユもモ半マンのノ朝テウ成セイるルくク一イツ考コウくク家カ藏ザウり
 ひヒはハありリとトもモ久キウ人ニヒはハ是ゼンやヤ上カミのノ膏コウ澤ザク下ゲ万マン民
 にニ及キびビ有ユぐグとトたタ才サイたタとト多タ人ニヒ方ホウかカり

附録

花の都配唐操

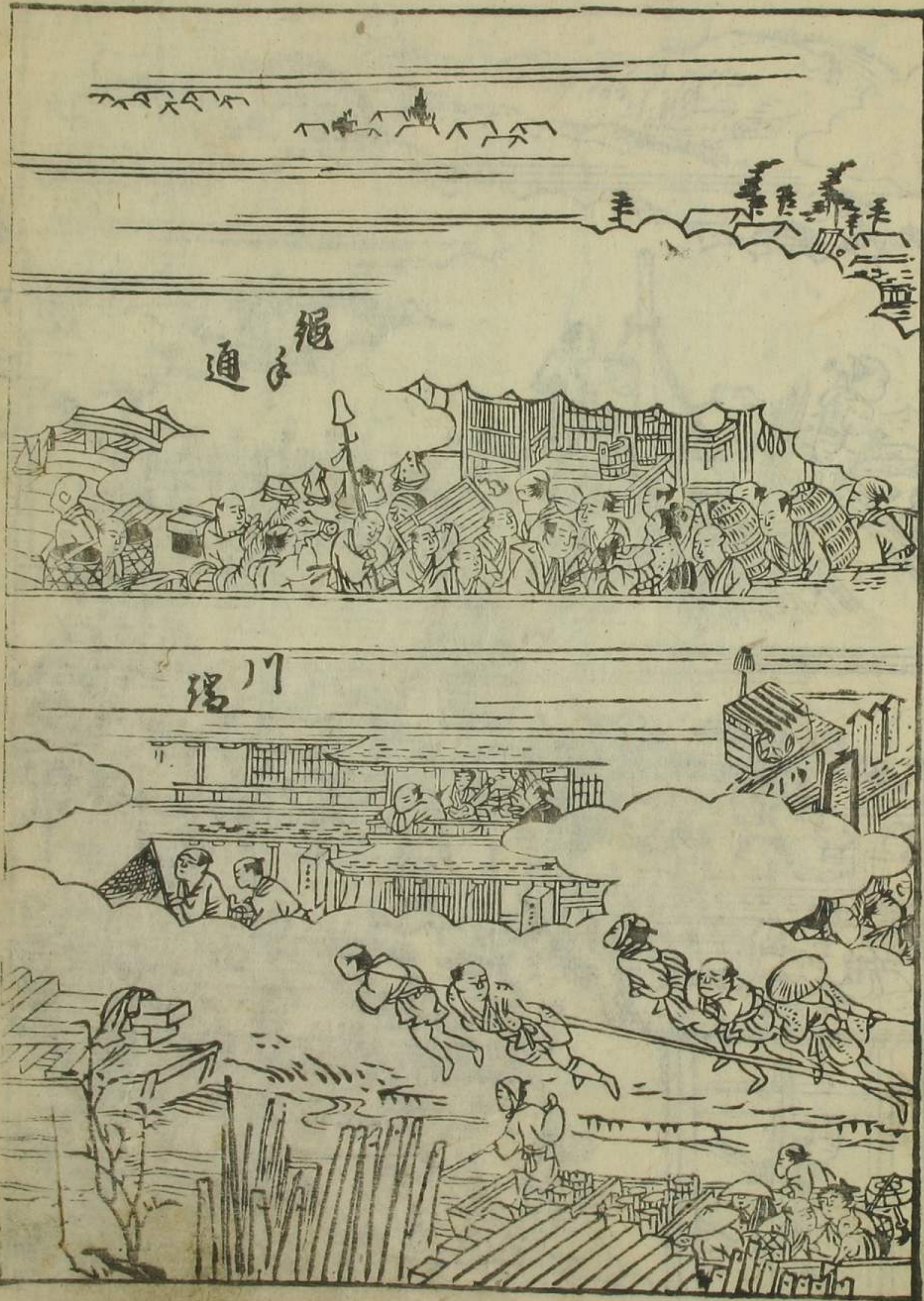
扱サツもモ京キョウ都トのノ災サイ後ゴ復フク建ケン本ホン普フ請キョウかカどト追ツイくク成セイ終シユウ
 してシテ京キョウ系ケイ二ニ系ケイかカどトのノ繁マン華カのノ地チのノ豪コウ富フのノ住ジュ居キョ
 へヘはハ小コ朝テウ成セイるルくクてテ見ミあアりリとトしシんンもモ上カミ系ケイのノ
 あアつツりリ未ミだダ復フク建ケンとトもモはハぐグくク禮レイ弒シ乃ノ在ザイ家カ

又へ糸借人紙頼とせし寺社方へは依りし之
 しけしごとく又或濟寺杯を二十間四面乃飯
 濟堂四月月中旬より換り十日がらるの濟日どり
 少く建立とらやこの一宗の威んるるや江戸
 大坂のいふ及び他處の奥筑紫乃ともく
 よりもあひひくの寄進との濟地築の移り
 もの及繁子紙にそし疑し即當時きよ
 の跡よ移りしうりしされば彼濟寺杯法國
 の進お進く寄進ふなるはとけよりを國

法宗の米菰とせしと金銀紙奉寺く
 寄進し枝本るど紙とり紙とせども奉
 普情の米と濟中りしふけしとてく飯建紙
 そしとされしうりされば公卿方の湯飯居も
 東山北山の寺院ふと紙始し七糸九糸の
 立所の菰とすい麻ヶ谷齋が券あとりれ
 農菰小入らせまひく怪しん紙がよせり
 糸の幕門やまへし牛部やふと糸樂乃益
 所し御系西陣の織との作し當時普情

のひまもさうりく悉くは紫竹を林院を乃在
 家瓜くりの住居く家職をいころむむ其乃
 中ふ津書くつの音ねえくけつ又たお管くえん法ほふのまくへ
 へころりてたさてふ機き音ねに隣となりで牛うし吹ふはく
 とおんおん勢せい驛えきの勢せいといひくけつかかた
 右みぎの力ちから種たねとらるりぬさんべ津武家つぶけのい多
 く東あづまよ飯居いひのい建仁寺けんにんじ所ところ祇園ぎえん界かい
 知恩院ちおんいん町下ちゆうげの系けいよ一軒いっけんの空あかやもろく縄なひ
 子こあひ公御こうご此こゝ 皇居こうきに通とほひの道みちとさり

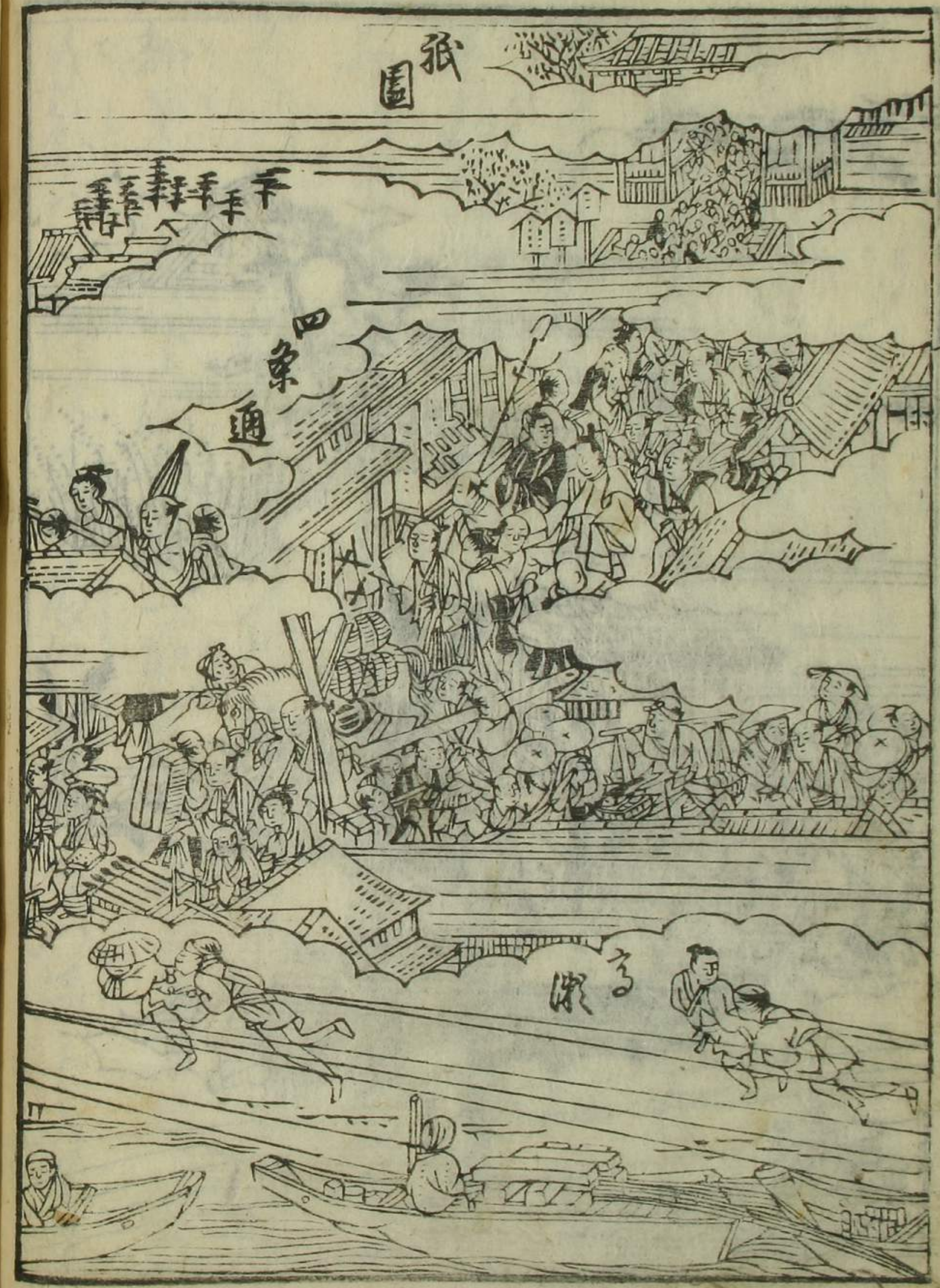




通子

瑞川

乃出卷上



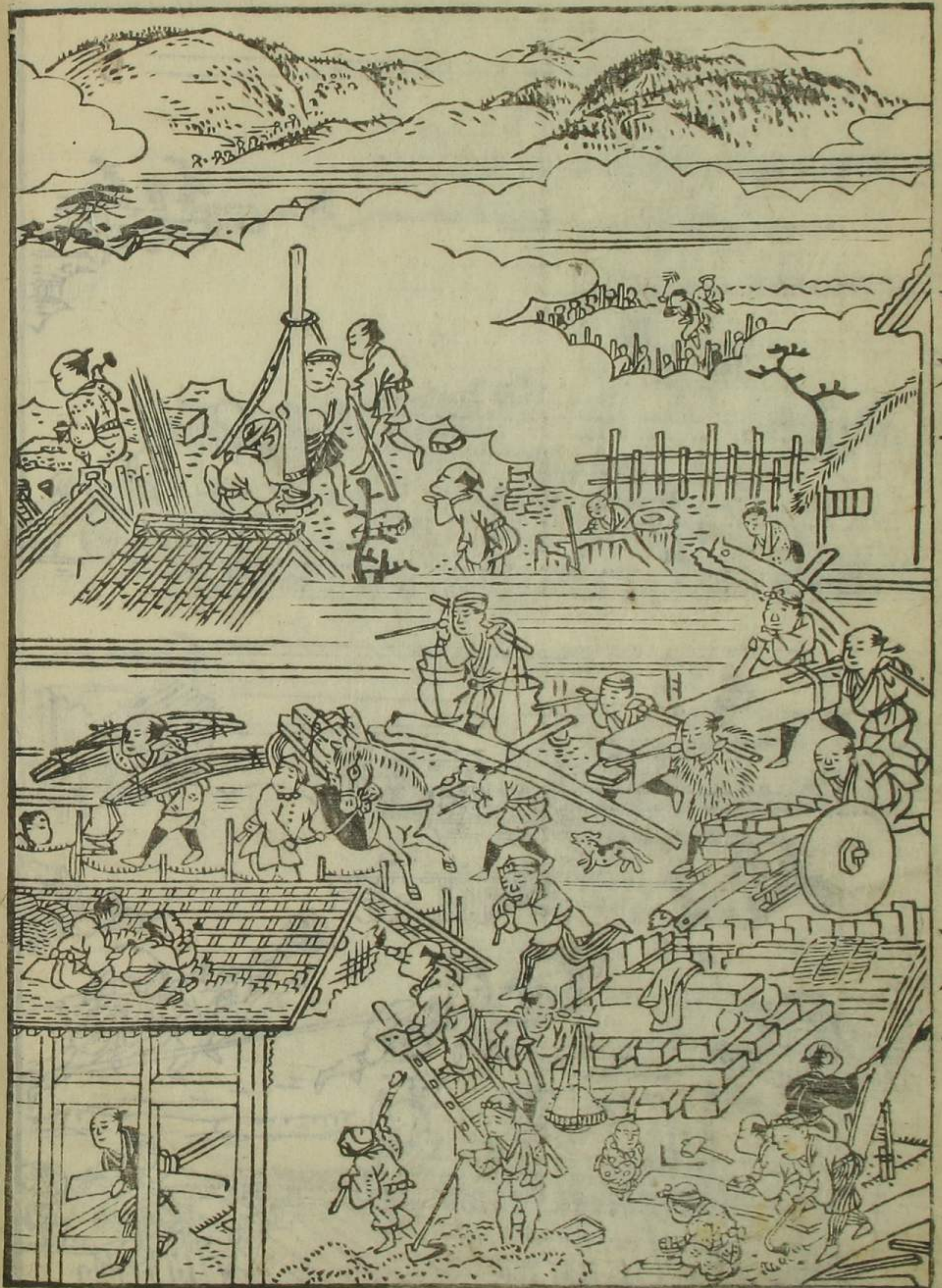
我園

通東

深

乃出卷上

乃出卷上



めを松よ大火の海を海東の佳糸も枯くそぬらん
 とそのひの外獨家の様ひいおに倍一けありの
 盤栄日夜蘭香焼ニ味深淡る濃もろく活中乃
 ふろくくしんあき松とん米のころり新下のや
 店の街乃し所せむく居るさび柱木の安賣
 艘ののど焼ニ度花掃の多いさ門さ馬追男
 のりてのさしに竹あさり花容のみも思くも
 仲居花車がさやさり舞うよつぬけさ武家
 へ彼人の繁口のへの字形ふ形と公家の優

邦出巻上

十九

龍ハ位冠（いゝ）とて一々鉄（てつ）鑿（さく）を（を）思（おも）く（を）ん（を）ぬ（を）ひ（を）ん（を）く（を）の
 硝子店（しょうじ）やア（を）く（を）の（を）産（う）人（じん）榮（えい）子（し）と（を）も（を）く（を）も
 くりとや小（こ）乃（の）と（を）の（を）産（う）人（じん）榮（えい）子（し）と（を）も（を）く（を）も
 夫（お）人（じん）念（ねん）志（し）を（を）教（きやう）の（を）と（を）ん（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 くら大（おほ）極（ごく）ひ（を）お（を）代（だい）未（み）時（じ）の（を）警（けい）昌（しやう）花（か）の（を）都（と）と（を）も
 今（いま）と（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）や（を）り（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 礼（らい）の（を）田（でん）舎（しゃ）の（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 隱（いん）家（か）の（を）疝（ぜん）疔（ぢやう）を（を）疔（ぢやう）痛（いた）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 の（を）毒（どく）と（を）眉（まゆ）間（ま）の（を）皺（しわ）を（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 小（こ）乃（の）と（を）の（を）産（う）人（じん）榮（えい）子（し）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 今（いま）と（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）や（を）り（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 礼（らい）の（を）田（でん）舎（しゃ）の（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 隱（いん）家（か）の（を）疝（ぜん）疔（ぢやう）を（を）疔（ぢやう）痛（いた）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 の（を）毒（どく）と（を）眉（まゆ）間（ま）の（を）皺（しわ）を（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も

煉（れん）瓜（か）抄（しやう）を（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 瘡（そう）の（を）榮（えい）と（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 菟（う）よ（を）古（こ）不（ふ）吟（いん）り（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 沂（い）後（ご）と（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 上（じやう）糸（い）一（いつ）糸（い）堀（く）川（が）の（を）考（かう）不（ふ）田（でん）丸（わ）や（を）何（なに）糸（い）と（を）も
 糸（い）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 中（ちゆう）旬（じゆん）傷（きやう）を（を）ん（を）ぬ（を）け（を）あ（を）ら（を）と（を）も（を）く（を）も（を）く（を）も
 三
 三

しが正月廿九日下京より出火し〜〜〜狂風火
 勢猛とてけ忍ろし〜〜〜
 さてども上京へ一里余の處〜〜〜
 ば着く〜〜〜と案堵してあり
 々傍がどひの外〜〜〜
 京に飛火し〜〜〜
 とり〜〜〜
 さてども大傷をのぞき〜〜〜
 にあ〜〜〜

かせんとし〜〜〜
 中人長持小押入〜〜〜
 くれ〜〜〜
 あり〜〜〜
 さら〜〜〜
 さて〜〜〜
 後〜〜〜
 縦糸〜〜〜
 つて〜〜〜

さぐりつんねに方の空板るれば板の板の死作り
 一板棺に入る跡をふとくしてはる鬼ども
 が呵美せんともくヶ棺の棺おあつらん
 これども楽安安にありしとれさしと鬼
 半もろとてさしとせく断りてさ鬼
 どりて板板ゆりてさしとせく断りてさ鬼
 とさしとせく断りてさしとせく断りてさ鬼
 呆とろ安るれば安人どももおとけしと
 ちりぬあしりぬんはさしとせく断りてさ鬼

南の方と見えしとてさしとせく断りてさ鬼
 のとあれた叫ぶ夢のゆゑも一板あれたさめく
 母の地獄ろるん一罪人どももの極火ふとさ
 鬼どももふ呵美せんともくヶ棺の棺おあつらん
 いくよも一と極出の道小ゆるとらとさめく
 行よあさしより火よ響るらるよ馬どもも
 されてうけ来るさしとせく断りてさ鬼
 さしとせく断りてさしとせく断りてさ鬼
 人の肩ふくしてさしとせく断りてさ鬼

く只今ただいま一ひとくさりのる鬼人おにびとなまやむ世
界かいよりさうそらどものしじましじまさうそくぞあるん
とふころな迷まよひてさうそらさうそら
らふななわらわがあさふしらの堂どうありく灯明とうめい
くさうふんくたれが漸しぜんくさうそらさうそら
ふわわ一ひと堂どうの内うちふあま大王おおう物生ものせい神かみさうそく
列りくなな一ひと儼げん然ぜんとて並ならびのふしはさうそらさうそら
少すくくさうそらあまの聴ちかるる人ひと一ひとくさうそらさうそら
跪ひざまつたうさうまま来きた依よの安やす婆ばよあり一ひとと人ひと

く海うみよりとてなせび人のものぬぬみくは
半はんもさう一ひと折せりく念ねん仏ぶつもPへ作り定さだめく鬼おに科か
も呼よく作しらんんに極ごく楽らくよ送おくりありとさうそら
とさくくの足あしのさうそら一ひとくさうそらさうそら
折せりく忍にん入いくさうそら一ひとく勢せいとあびく折せりく内うち
遙とほく糸いとの音ね念ねん仏ぶつの智ちれれけけつつりさうそら
西さい方ほう極ごく楽らくの上うへふ上うへ生せいるる人ひと一ひとと思おもひくさうそら
くらんらんさんさんに教しよひく私わがの安やす婆ばの付つけ人ひと
小こて作り観くわん音おんさうそら一ひとく家かとさうそら

多入りゆく百寶莊嚴の蓮臺の上ふのふせ
 さられとあしく思ひし中にもあつらひされ
 燈人ともものおとり逃るは追ひつゝお傍に
 あり種々の修持ありと怪しむはく人智は
 わげなく解ふぞそとれた傍に人ありくらし
 ちうそをえん火のいろりや入て風の遠ひく
 よわらひも木のあんな堂へ気があつめられ
 よとらふに心をもつて念仏くわり
 たりは松さく夜へかめごとと明らるあま

くらんたる松の樹蔭にぐる岡の名ふ名標を
 く今も風ふどくく圍ひ笑ひた女ふど乃
 細細より風かんて是もんまは松葉と
 ちでこもる地さめやじりくくふるふく
 人別に異るるまふかごつてやたてそ
 なるふあさくより志もる友人ありこれ
 いかにこふ初めく松のふるり夏のさめ
 くらんてふてよりくくんては船岡の跡をこ
 あつりの人の若かりてあはれはあはれ

うるりこのとらた熱^{あつ}の冷汗^{ひやあせ}して傷^{いた}を乃^す
 熱^{あつ}もこころごとくさめ我^{わが}身^みのまに返^{かへ}りて思^{おも}
 悲^{かな}しんたの門^{かど}妻子^{しよこ}怨^{うらみ}も室^{むろ}もこふ言^{こと}ひいへ
 万^{ばん}牛^ごのけを夏^{なつ}の世^よといふ牛^ごの世^よこころは是^{こゝろ}を喜^が提^た
 の種^{たね}とふし髪^{かみ}をそり夜^よに露^{つゆ}にそめく仏^{ぶつ}の
 入^いりて怨^{うらみ}生^{せい}ふりて六^{ろく}乃^なのめくりてこころを
 竹^{たけ}ぐこ今^{いま}の仲^{なかつ}く世^よの候^{まは}るものうさふくぶれ
 けし仏^{ぶつ}のやうにぬりてぞ仏^{ぶつ}衆^{しゆ}生^{じやう}縁^{えん}起^きと
 仏^{ぶつ}のとらた人^{ひと}の火^ひ半^{はん}にあつて一^{いち}の若^{わが}くはと

しんものうたのひとらた喜^き提^たの縁^{えん}ゆ
 うりうりふりうた若^{わが}智^ち識^しのく竹^{たけ}ぐとわされ
 バケ柳^{やなぎ}ふ長^{なが}をのうりて竹^{たけ}ぐも実^みふ太平^{たいへい}
 の玉^{たま}りのよき世^よ縁^{えん}されんをせしむのひぬも
 あり実^みふも彼^{かの}男^{おとこ}のいふて世^よ縁^{えん}されんを
 けは長^{なが}ののうりてさういふぬありとあふま
 つけくも君^{きみ}のあみれいもかうくおう
 やんゆりくる中^{なかつ}の火^ひ半^{はん}のちとせも万^{ばん}民^{みん}業^{ごう}分^{ぶん}
 とのうみて都^{みやこ}の誓^{ちか}花^{はな}りふ百^{ひやく}倍^{ばい}するを目^め出^で

法華經

十四

とたやぶと目もさうしとあし宰予が夢ん
とく机にくくさくく甜瓜僧しぬ

哦花嘯月謫仙醉 石枕中衾陳博眠
清福初知今日樂 竟風舜雨太平年

花紅葉都吐卷上終

世本出水墨を好むの自然なり
漸情もあがり又出た元大切よ
油の意入ゆき自火災とも
中ぬれず花と彩あめ

花紅葉都吐

